

坂 尻 遺 跡

—昭和62年度静岡小松フォークリフト株式会社整備工場等建設に伴う

緊急発掘調査報告書—

1988

静岡県袋井市教育委員会

例 言

1. 本報告書は、静岡小松フォークリフト株式会社代表取締役内山金吉（静岡県静岡市北九子1丁目31番4号）を委託者とし、袋井市長湖東二郎（静岡県袋井市国本3070番地の1）を受託者として行った昭和62年度坂尻遺跡緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、袋井市教育委員会社会教育課文化振興係の吉岡伸夫を調査担当者とし、静岡県教育委員会文化課の指導を得て実施した。
3. 本報告書に掲載した挿図・写真図版はすべて吉岡が作成した。
4. 本報告書の執筆・編集は吉岡が行った。また本調査に係る事務は袋井市教育委員会社会教育課文化振興係建部千代子が担当した。
5. 発掘調査資料は、すべて袋井市教育委員会が保管している。

目 次

1 調査にいたる経過	1
2 立 地	2
3 発掘調査の方法・経過・調査整理体制	2
4 遺 構	6
5 遺 物	10
6 ま と め	16

挿 図 目 次

第1図 坂尻遺跡位置図	1
第2図 坂尻遺跡周辺地形図・遺跡分布図	2
第3図 坂尻遺跡1面全体図	3
第4図 坂尻遺跡2面全体図	4
第5図 SD2・SI2実測図	6
第6図 SB1実測図	8
第7図 SB2実測図	9
第8図 SI1実測図	10
第9図 SD2壁・土器片集積部出土土器実測図	12
第10図 SD2・4出土土器実測図・拓影	13
第11図 SD4・1・3出土土器・その他の遺物実測図	14

表 目 次

第1表 昭和62年度検出遺構一覧表	16
-------------------------	----

図 版 目 次

図版1 坂尻遺跡1面完掘状況 坂尻遺跡2面完掘状況
図版2 SD2・SI2完掘近景 SD1・2完掘近景
図版3 SD2・4完掘近景 SD1・2・4完掘近景
図版4 SB1完掘近景 SB2完掘近景
図版5 SI3完掘近景 発掘調査風景

昭和62年度 坂尻遺跡発掘調査報告書

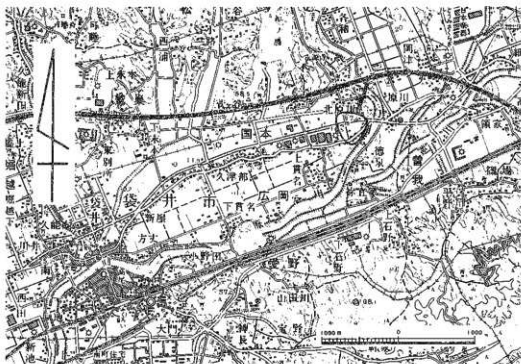
1 調査にいたる経過

昭和60（1985）年、一般国道1号袋井バイパス（袋井市北地区分）の工事がほぼ終了してから、坂尻遺跡の範囲内において、工場の新築・増築等が徐々に進行してきている。

静岡小松フォークリフト（株）の当地への進出計画は3年ほど前から提示されていたが、その後具体化することなく年月が経過した。

昭和61年夏、静岡小松フォークリフト（株）から袋井市教育委員会へ、昭和62年度発掘調査（記録保存）を完了し、整備工場建設に着手したい旨連絡があった。発掘調査を担当する社会教育課では静岡県教育委員会とも協議し、昭和62年度上半期に現地発掘調査を実施することにした。

昭和62年3月、静岡小松フォークリフト（株）から文化庁長官あて「埋蔵文化財発掘の通知について」（文化財保護法一昭和25年法律第214号一第57条の2第1項）が提出され、袋井市教育委員会は坂尻遺跡発掘調査を文化庁長官へ通知した。昭和62年5月11日、埋蔵文化財（坂尻遺跡）発掘調査委託契約書を締結し、同月21日、現地作業を開始するにいった。



第1図 坂尻遺跡位置図

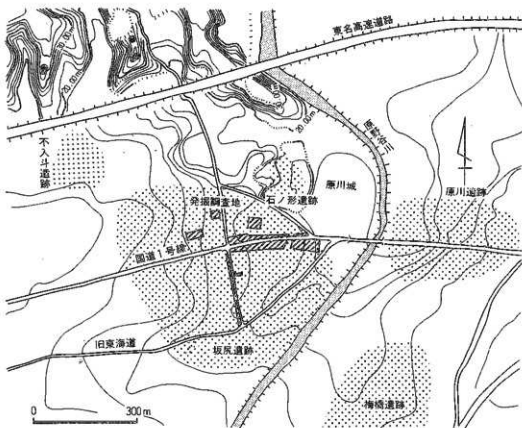
2 立 地

南流する原野谷川は、更新世中期に属する小笠山丘陵につきあたり、河道を西へ転ずる。また逆川・垂木川が近接し、西流し始める。

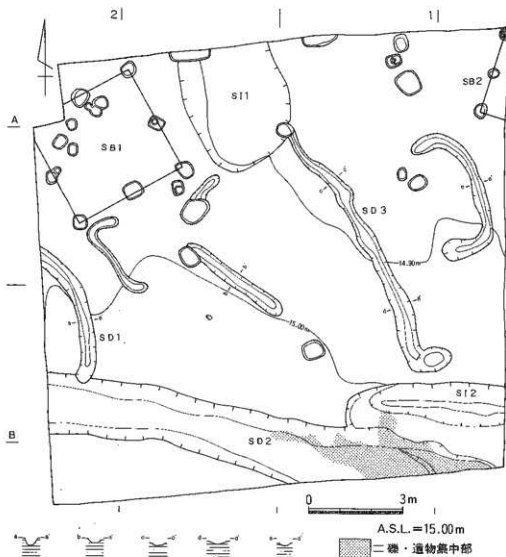
坂尻遺跡は、この河道転換点の西方に幅広く形成された自然堤防の頂部から西緩斜面（標高15.0～17.50m）にかけて立地する。自然堤防は北に迫った丘陵末端へ連続し、後背低地との比高差は平均約3mである。

原野谷川・逆川・垂木川が形成した自然堤防上に初めて人々が住みついた（原川遺跡）のは弥生時代中期と考えられる。後期にいたり、集落数（国本・梅橋・篠場・領家遺跡）は増加する。坂尻遺跡では古墳時代前期に集落が成立し、後期初頭になるとその規模は西方へ拡大する。この坂尻集落の拡大期と軌を一にして、北方丘陵の縁辺部にも小規模な集落（不入斗・石ノ形遺跡）が営まれるようになる。坂尻遺跡は、これら古墳時代後期の遺跡群のなかで、ほぼ中央に位置しており、表面採集が可能な遺物の分布範囲も著しく広い。

3 発掘調査の方法・経過・調査整理体制



第2図 坂尻遺跡周辺地形図・遺跡分布図

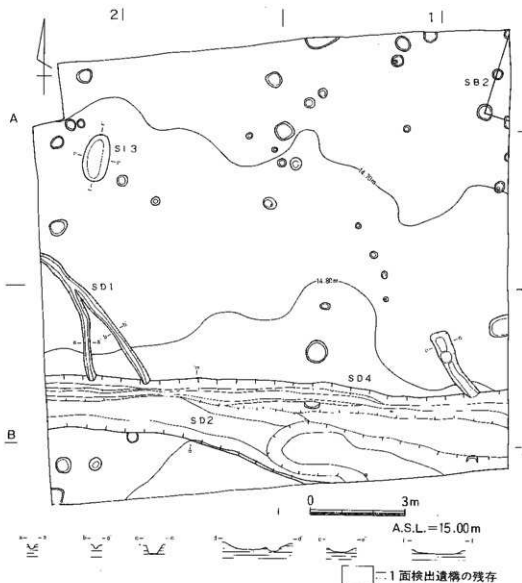


第3図 板尻遺跡1面全体図

i) 方 法

発掘調査地を任意に4分割し、1辺10mの方形グリッド（大グリッド）を設定した。東西を1・2区、北南をA・B区と仮称し、その組み合わせを大グリッド名とした。さらに大グリッドを4分割（1辺5m）し、小グリッドとした（北西-南西-北東-南東の順にa・b・c・d区と呼んだ）。分層発掘・掘り下げは大グリッドごとに行い、小グリッドは遺物の取り上げ、現地図面作成等の基本単位である。

遺構は検出順に001・002 ……（柱穴状遺構はP-1・2 ……）と通し番号を付して呼び、100分の1縮尺の略測図を作成して、伴出遺物を混同しないよう努めた。



第4図 板坑遺跡2面全体図

現地図面は20分の1縮尺を基本とし、やり方式により作成した。全体図はⅢ層内において2面（1・2面）作成し、遺物の出土状態等詳細な図面が必要な場合は、10分の1縮尺図を作成した。

記録写真はブローニーサイズ原画（白黒）と35mmサイズ原画（白黒・カラーリバーサル）を併用した。

ii) 経過

昭和62年5月21～23日 重機により客土・耕作土を除去した後、発掘基本杭を設定。ベンチマ

ークを移動させる。

5月25～30日 発掘資材・ベルトコンベアー・発電機等を搬入。26日よりⅡ層の掘り下げに取りかかる。2B区内において土師器・須恵器片が若干出土したが、Ⅱ層に含まれる遺物量は多くない。一部Ⅲ層上面まで掘り下げ完了。

6月1～6日 Ⅲ層上面にて遺構確認作業。SB2の柱穴列以外は明瞭でなく、さらにⅢ層を約15cm掘り下げることにする。排水溝を回し、あわせてⅢ層の厚さを確認。国道1号線付近に比べ、層厚は薄く、含まれるマンガン粒の量も少ない。

6月8～13日 Ⅲ層を約15cm掘り下げたところで遺構確認作業。1B区南寄りから多量の上器片が出土し、SD2の存在に気づく。SD2 SB1 S11・2等を検出。遺構の発掘に取りかかる。

6月15～19日 遺構の発掘完了。SD2内に礫・土器片の集積部を検出する。全体・部分写真撮影。全体図（1面）・SD2遺物出土状態図を作成。18日よりⅢ層の掘り下げを再開した。

6月22～27日 Ⅲ層を除去し、遺構確認作業。SD4 S13等を検出。遺構の発掘もほぼ終了する。

6月30～7月4日 全体完了写真を撮影。全体図（2面）を作成した後、発掘区4隅に1辺1.5mの方形小グリッドを掘り、Ⅲ層下の上層を観察。7月4日、発掘資材を撤収し、現地発掘調査のすべてを終了した。

iii) 調査整体系制

発掘調査計画機関 静岡小松フォークリフト株式会社

発掘調査指導機関 静岡県教育委員会文化課

発掘調査実施機関 袋井市教育委員会

教 育 長 鈴木勲一

社会教育課長 井口育夫

文化振興係長 小粥保大

主 事 建部千代子（経理担当）

主任学芸員 吉岡伸夫（調査担当者）

学 芸 員 永井義博

現地発掘調査

調査補助員 早川保子

発掘作業員 大橋庄一 佐藤好孝 三浦久雄 高橋秋義 寺田貞夫
井谷広男 三浦とく江 海野こう 山崎雪江 鈴木敏子
山崎好江 鈴木きみ子 戸倉みづ子 鈴木まさ子

発掘資料整理

資料整理員 窪野佳奈子 加藤伸江 相沢明子 鈴木寿美子

4 遺 構

i) 基本層位

昭和62年度の発掘調査地点は坂尻遺跡の北西縁にあたり、国道1号線からは北へ約100m離れている。

基本層位を上層より列举すれば次のとおりである。

I層 暗灰色粘土(耕作土) 層厚20~30cm 最下に黄褐色の床土がある

II層 管鉄・若干のマンガン粒混じり灰色粘土 層厚15~20cm

III層 マンガン粒混じり暗灰色微砂質粘土 層厚20~30cm

IV層 粘性の強い灰白色粘土あるいは緑灰色・暗青灰色粘土またはこれらの互層

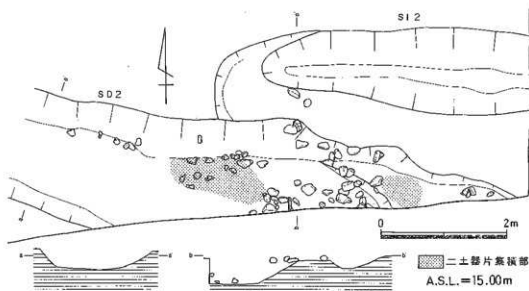
I層からもわずかに土器片等が出土するが、明瞭な遺物包含層はII・III層である。このII・III層は図1バイパス発掘調査時に確認したII・III(a・b)層(五島 吉岡他1985)にそれぞれ対応すると考えているが、II層内に平安時代以降中・近世の遺物は見られず、III層もマンガン粒の多少によりa・b層に細分できない。マンガン粒の量はIII層層的で少なく、II・III層の遺物包含量は相対的に稀薄である。

以下の記述に使用する遺構検出面1・2面は、1面がIII層を約15cm掘り下げた検出面、2面がIII層を除去したIV層上面を指している。土層の変化に基づく区分ではなく、あくまでも便宜的なものであることを付記しておく。

ii) 溝状遺構(SD)

SD1

2A-b区から2B-a区にかけて弧状に伸びる小溝。確認長約5.2m 幅0.4~0.5mを測る。



第5図 SD2 SI2実測図

1面で確認できたが、2面においては二段に別れ、ともにSD2へ合流していた。暗灰色砂質粘土を覆土とし、断面は底面と壁の境が明瞭なU状をなす。

出土遺物は須恵器杯蓋(第11図-53)1点のみである。SD2とほぼ同時期に存在していたと思われる。

SD2

1・2B区内をほぼ東西に走る。確認長14.3m 幅1.6~2.0mを測る。1面で確認できた。SD4を切断し、SI2と重複している。覆土は上下2層(上層=暗灰色砂質粘土 下層=灰色粘土)に区分でき、上層は西に寄るほど有機質(黒味)を増す。断面は壁の傾斜が緩やかなU状をなし、底面に凹凸は少ない。東寄りの下層中に礫・土器片の集積部が認められた。土器片は細片化しており、完形に復元できる破片はほとんど無い。土器片の顕著な集積はさらに2ヶ所に分れていた。

礫・土器片集積部に含まれていた器種(第9図)には、須恵器杯蓋 杯身 無蓋高杯 土師器杯蓋 杯身 甕がある。土器片の量で比較するかぎり、土師器が約85%を占める。磁石(第11図-58) 土製の管玉(第11図-59)が混在していた。他にSD2から須恵器短頸壺 土師器高杯 台付甕(第10図23~41)が出土している。

6世紀後半から末葉にかけて機能していたと考えられる。

SD3

1A・B区の1面で確認できた。全長約8.0m 幅0.3~0.6mを測る。南東から北西へほぼ直線的に伸び、両端は柱穴状の落ち込みとなり途切れていた。暗灰色砂質粘土を覆土とし、断面は浅いすり鉢状をなす。

出土遺物(第11図-54)は少ないが、SD2と同時期の溝と考えている。

SD4

第2面にいたりその所在に気づいた。確認長14.5m 幅0.7~1.2mを測る。ほぼ東西に伸び、SD2 SI2に切断される。SD2の下層とよく似た灰色粘土を覆土とする。壁は緩やかに傾斜するが、中央にさらに一段深い流路を有していた。東端近くに北へ分岐する小溝(全長2.3m 幅0.4~0.5m)があり、底面の一部が柱穴状に窪んでいた。

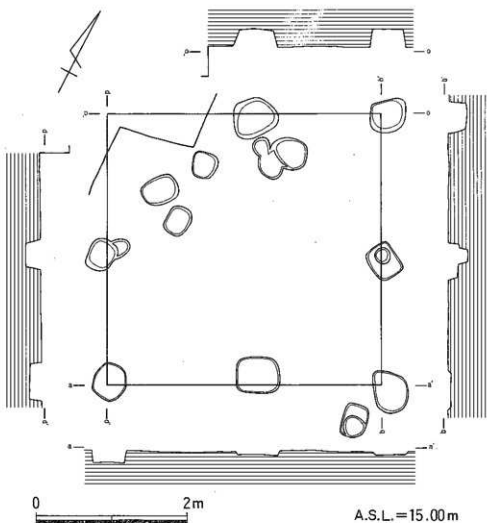
出土遺物(第10図-42~46 第11図-47~52)には須恵器杯蓋 杯身 櫛描波状文を有する甕口縁部 土師器杯蓋 高杯 甕等がある。

SD4の機能していた時期はSD2に近似するが先行し、6世紀末葉にはすでに埋没していたと思われる。

その他の溝状遺構

1面において4条の小溝(全長1.0~6.5m 幅0.2~0.7m)が検出された。多くは南東-北西に走り、両端が鉤状に屈曲していた。暗灰色砂質粘土を覆土とし、底面は彎曲して断面すり鉢状をなす。出土遺物は無い。堅穴住居等に伴う壁溝とも考えたが、柱穴等は不明確で、その性格を断定しえない。

iii) 獨立柱遺物(SB)



第6図 SB1実測図

SB1

2 A区の1面で確認できた。北西隅は調査区外におよぶ。間口2間(3.6m)×奥行2間(3.6m) 棟方位N-27° 30'-Wを呈し、側柱のみからなる。

柱穴掘り方の平面は隅丸方形様(長辺45~70cm 短辺35~50cm)をなし、東西の間柱には柱痕を思わせる丸い落ち込み(底径約15cm)が認められた。深さ20cm前後を測るが、南面の掘り方は総じて浅い。暗灰色砂質粘土を主体的な覆土とし、灰白色・黒灰色・緑灰色粘土塊を底面近くに含んでいた。柱根・礎板等はない。西面の間柱に見られる壁の脹らみは柱の抜き取り痕とも考えられる。

北半に6ヶ所、南東の隅柱に隣接して1ヶ所柱穴(径25~50cm 深さ10~25cm)が検出され

た。規則的な分布を示さず、その性格はよく判らない。

掘り方等に伴った遺物は無く、構築時期は不明である。

SB 2

調査区北東隅(1A-c区)のⅢ層上面において、西面の側柱(2間分=2.6m)と南面の間柱1ヶ所のみ確認できた。棟方位N-17°30'-Eを呈する。大半は調査区外にある。

柱穴掘り方は平面楕円形(径30~45cm 深さ20~55cm)をなし、北端の掘り方底面には数段の落ち込みが認められた。南面の間柱は浅い。黒色有機質土を覆土とする。南西の隅柱に柱根が残っていた。柱根は約20cm浮いており、下端周縁をナタ状工具により斜めに粗く削り落している。

構築時期を推定させる出土遺物は無いが、従来の発掘調査成果に従えば、黒色有機質土は中世以降の掘立柱建物に主に認められた覆土である。

その他の柱穴状遺構

1面で9ヶ所、2面において20数ヶ所の柱穴状の落ち込みを確認した。径20~50cmを測る。1面では大形のものが目立ち、底面に柱痕状の丸い窪みや柱根を残し、明らかに柱穴であることを示す落ち込みもあるが、2面の多くは浅く小規模である。暗灰色砂質粘土・黒色有機質土を覆土とする。1A-b 2B-b区等に認められた配列は、あるいは櫓列・柱列かもしれない。

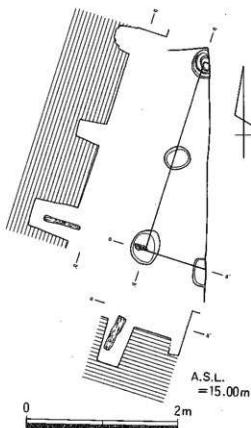
iv) 竪穴状遺構(SI)

SI 1

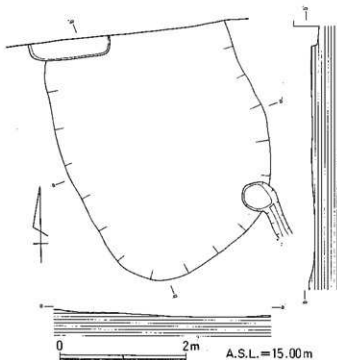
2A-c・d区の1面で確認できた。SB1の東に隣接する。平面は隅丸長方形に近い楕円形(確認長径3.9m 短径3.2m 深さ約0.1m)をなし、長軸を北北西-南南東へ向ける。平面楕円形様の落ち込みとSD3に切断され、北端は調査区外におよんでいる。底面と壁の境は明瞭でなく、壁の傾斜も緩やかで、一見自然の窪地といった感じを持つが、平面観察における黒色有機質土(覆土)とⅢ層の境界は明瞭である。底面に顕著な落ち込みは無い。

覆土中に土師器細片を含んでいた。古墳時代後期に属すると考えている。

SI 2



第7図 SB2実測図



第8図 SI 1実測図

1B-a・c区の一面で確認できた。平面楕円形（確認長径5.0m 短径2.5m 深さ約0.3m）長軸方位はほぼ東西を呈する。SD 2と重複していた。暗灰色粘土を主体的な覆土とし、北寄りの一段深い落ち込み内には暗灰色砂質粘土が堆積していた。この落ち込みは直下にあるSD 4の流路を誤認してSI 2とした可能性があり、断面形は浅いすり鉢状をなすと思われる。

出土遺物は無いが、SD 2に集積していた礫の一部がSI 2の南壁を覆っており、むしろSD 2の北岸の賑らみ等と解するべきかもしれない。

SI 3

2A-b区の2面にいたり確認できた。平面楕円形（長径1.5m 短径0.8m 深さ0.1~0.2m）をなす小形の土坑状竈穴である。長軸方位はほぼ北-南を指す。断面すり鉢状を呈し、暗灰色砂質粘土を覆土とする。

検出位置は1面で確認されたSB 1側柱の内側にあたり、SB 1に伴う遺構とも考えられる。

その他の竈穴状遺構

1面の調査区北端（1A-d 2A-c区）において2ヶ所竈穴状遺構を検出した。全形を知らないが、平面は楕円形をなし、SI 3とほぼ同規模と思われる。壁の傾斜はきつく、断面U状を呈する。緑灰色粘土・暗灰色砂質粘土を覆土とする。

5 遺 物

昭和62年度の出土遺物には土器（土師器・須恵器） 手捏土器 円盤型土製品 土製管土製支脚 砥石がある。SD 2・4からの出土が大半を占め、包含層（Ⅱ・Ⅲ層）に含まれる遺物量は稀薄であった。また平安時代以降の灰釉陶器 山茶碗等は一切出土していない。

1) 土器

SD 2 礫・土器片集積部出土土器（第9図）

須恵器

杯蓋（1~3）最大径11.2~10.8cm 器高4.1~4.4cm 天井部は丸みを持ち、約2分の1を

回転へう削りする。口縁部は内彎し、端部を丸く仕上げる。肩部に1条淡い沈線を施したものがある。川江編年（川江1979）Ⅲ期末葉に属する資料であろう。

杯身（4～9）最大径14.9～11.4cm 器高4.7～3.8cm 大小・深淺の差はあるが、総じて底部の回転へう削り範囲は狭い。大形のものでは立ちあがり内彎し、小形になると外反気味に伸びる。立ちあがり、受け部とも短く、端部を丸く仕上げている。最大径のやや大きなものを含むが、川江編年Ⅲ期後葉～末葉に属する資料とみて大過ないと思われる。

無蓋高杯（10・11）最大径13.7cm 深く丸みのある体部に淡い3条の沈線を施す。Ⅱ縁部は外反し、端部を丸く仕上げる。川江編年Ⅲ期後葉から出現し、Ⅳ期前葉にいたり普遍化する器形である。

土師器

杯蓋（12）最大径18.2cm 口縁端部が下方へ屈曲し、身受け部を作る。奈良時代以降の杯蓋と思われる。

杯身（13～18）最大径14.2～12.4cm 器高4.7～5.0cm 13・16は深く、口縁部が内彎・内傾気味に立ちあがるといわれる和泉期の杯身である。口縁部内面にヨコナデによる幅広の窪みを持つ。Ⅱ縁部が大きく開く14は若干時期の遡る資料であろう。ともに端部を丸く仕上げる。17・18は須恵器杯身の模倣品、15は体部下半に張りがあり、内面にへうの先端によるものか数条の縦位刻みを有する。底部には指頭圧痕が目立つ。

甕（19～22）口径19.8～12.9cm 甕には4器種ある。1）厚手で口縁部の傾斜が急な14。端部は丸みを持つ。2）口縁部下半は外反し、上半が内彎気味に立ちあがる20。上半は段をなして肥厚し、ヨコナデ調整により端部を丸く仕上げる。3）外反する厚手の口縁部内面に横位の粗いハケメを施し、外面をヨコナデ調整する21。端部を先細く作る。4）最大径は胴部上半にあり、Ⅱ縁部がほぼ直立する22。端部を丸く仕上げ、頸部以下に縦位の細かいハケメを加える。4）は奈良時代後半まで残る小形の器種である。

SD 2 礎・土器片集積部出土の土器は総じて6世紀後半～末葉の時期に位置づけることが可能と考えている。

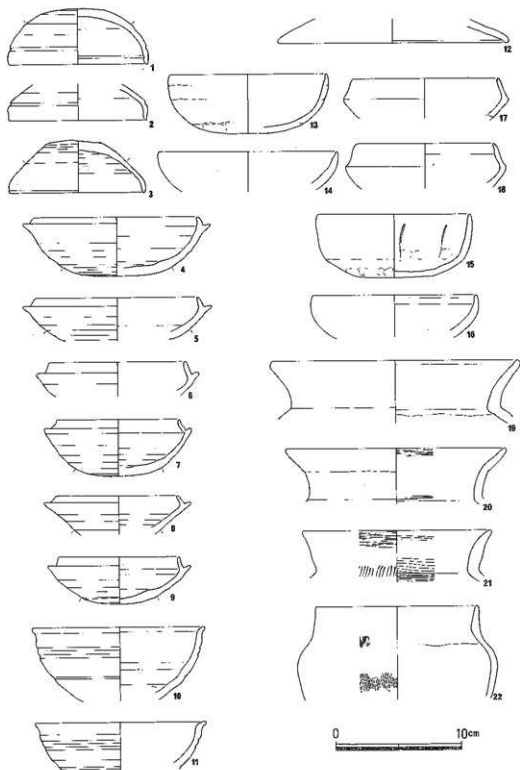
SD 2 出土土器（第10図-23～41）

須恵器

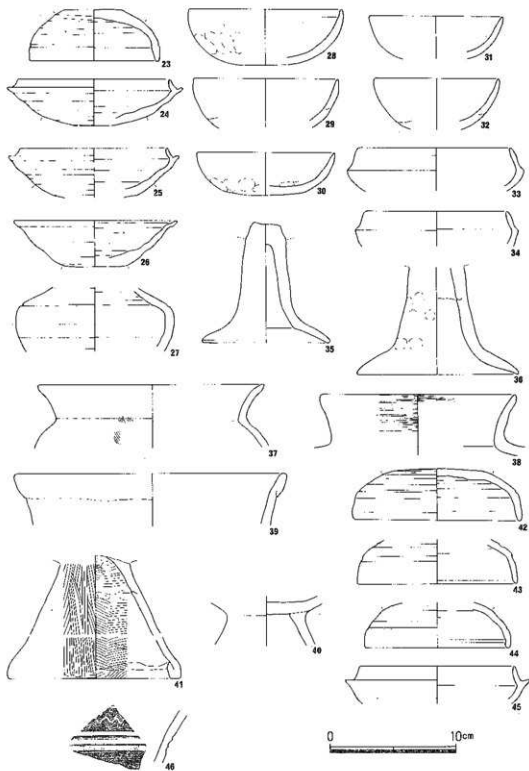
杯蓋（23）最大径10.2cm 器高4.1cm 天井頂部を平坦に、幅狭く回転へう削りし、肩部に1条沈線をめぐらす。礎・土器片集積部出土の杯蓋同様、川江編年Ⅲ期末葉に属する資料である。

杯身（24～26）最大径13.8～12.8cm 器高4.0～3.7cm 24・25は浅く、底部の約2分の1を回転へう削りする。立ちあがり外反気味に伸び、受け部とも端部を丸く仕上げる。川江編年Ⅲ期後葉に属する。26は伊場編年A類（川江1980）に対比しうる資料で、奈良時代初頭に位置づけられる。

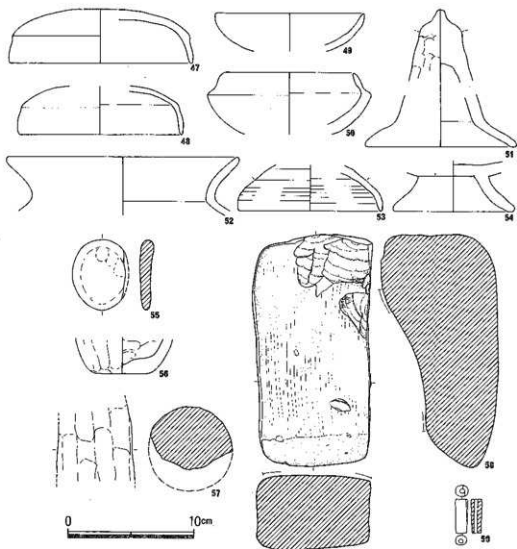
短頸甕（27）最大径12.5cm 口縁部・底部を欠く。肩部に1条淡い沈線を施し、体部下半に回転へう削りを加える。



第9図 SD 2 罐・土器片集積部出土土器実測図



第10図 SD 2 (23~41)・4 (42~46) 出土土器実測図・拓影



第11図 SD 4 (47~52)・1 (53)・3 (54) 出土土器・その他の遺物実測図

土師器

杯身 (28~34) 最大径14.0~10.0cm 器高3.4~4.5cm 28・29はいわゆる和泉期の杯身、33・34は須恵器模倣の杯身である。小型の30~32は口縁部が外に開き7世紀代まで降る可能性がある。口縁部内外面をヨコナデ調整し、多くが赤彩を施す。

高杯 (35・36) 杯部を欠くが、脚をソケット状に接合する。脚は下端近くで大きく開き、端部を丸く、先細く仕上げる。和泉期の特徴を残すが、接合部に太細の差があり、細いものは時期が降る可能性もある。外面に赤彩を施す。

甕 (37~41) 最大径21.5~15.5cm 37・38は礫・土器片集積部出土の甕1)に類似する。頸部以下に細かい縦位のハケメ、口縁部内外面にヨコナデを加える。39は口縁端部を折り返し、

肥厚させる。40・41は大形台付甕の台である。端部を内方へ折り返し、内外面を粗い横縦位のハケメにより仕上げている。昭和58年度の発掘調査（五島他1984）においても、川江編年Ⅲ期末葉の須恵器杯蓋・杯身と伴出している。

SD4出土土器（第10図-42～46 第11図-47～52）

須恵器

杯蓋（42～44） 最大径13.5～11.6cm 器高4.1～3.8cm 43は崩れているが肩部に稜の痕跡を残し、口縁端部は内傾する。42・43の肩部には1条淡い沈線がめぐり、端部を丸く仕上げる。川江編年Ⅲ期後葉の資料と考えているが、細部に時期の遡る要素を残している。

杯身（45） 最大径14.5cm SD2出土の杯身に比べ、大形で立ちあがりは高い。受け部も長く、端部を丸く仕上げている。川江編年Ⅲ期中葉～後葉に比定可能な資料である。

甕（46） 細片ながら、3条の幅広い沈線により断面三角形様の凸帯を作り出し、櫛描波条文を加える。

土師器

杯蓋（47・48） 最大径14.6・13.1cm 須恵器杯蓋の模倣品のみ出土している。肩部に稜線様の脹らみを持ち、端部を丸く仕上げる。最大径14.0cm前後の大形品が主体をなす。

杯身（49・50） 最大径13.0～11.9cm 浅く、口縁部が大きく開く49は7世紀代まで降る可能性がある。須恵器模倣杯身50はSD2出土品に比べ深く、厚手である。

高杯（51） SD2川土の高杯脚と同形態を示すが、脚下半の開きは大きく、外面に指頭爪痕が目立つ。

甕（52） 最大径18.5cm SD2磯・土器片集積部から出土した甕1)に類似するが、口縁部の開きは大きい。端部を丸く仕上げる。

その他の遺構・包含層出土土器（第11図-53・54）

最大径11.5cmを測り、川江編年Ⅲ期末葉に属する須恵器杯蓋がSD1から、輪接合をする短い土師器高杯の脚部片がSD3から出土している。

包含層（主にⅢ層）出土土器の器種・器形はSD2出土品と同様であるが、他に須恵器川江編年Ⅱ期的な立ちあがり（端部内傾）を持つ杯身小片、長脚2段透かしのある高杯脚部片、逸・平瓶の口縁部片、土師器輪接合を行う高杯脚部片、甕把手等が出土している。

手捏土器（第11図-56）

1B-a区のⅢ層から出土した。外面を縦位の指頭ナデ（底部不定方向）、内面を横斜位の長い指頭ナデにより仕上げている。内面に付着物（漆?）が残る。

円盤型土製品（第11図-55）

長径4.6cm 2B区内のSD2覆土下層から出土した。楕円形をなすよう周縁部を丸く整形している。剥落が著しいため明確でないが、平坦面に指頭痕が残る、土師器片の転用品ではないと判断している。

土製管玉（第11図-59）

径0.9cm 長さ2.6cm 重さ2.2g SD2磯・土器片集積部から出土した。土師質で黒灰色を

呈する。一端が若干細くなる。棒状具に粘土を巻きつけ、表面に磨きを加え仕上げたらしい。

土製支脚 (第11図-57)

1 B-d 区の排水路掘削時に出土したもので、SD 2 の礫・土器片集積部に伴っていた可能性もある。上半が細くなり、縦位の幅の広いナデにより多面体様を呈する。

砥石 (第11図-58)

長さ18.5cm 幅9.3cm 厚さ11.2cm 重さ2,720g SD 2 礫・土器片集積部から出土した。白然礫(砂岩)の傾斜面のみに幅広く使用痕を残す。使用面は中央が膨らみ彎曲している。

6 まとめ

検出遺構について

昭和62年度の発掘調査において検出された遺構の名称・規模・時期等を整理すれば第1表のとおりである。

第1表 昭和62年度検出遺構一覧表

名称	位置	平面形	延長・幅	規模 (m)	掘り方 平面形	掘り方 断面形	断面形	時期	備考
SD1	2A-b 2B-a	—	南-北西	長 (3.2) × 幅 (4-4.5)	—	—	1 面	6 C 後~末	2 面では 1 段に別れる SD2へ合流
SD2	1・2B	—	東-西	長 (4.3) × 幅 (4-2.5)	—	—	1 面	6 C 後~末	SD2を切断 2段と重複 礫・土器片集積部
SD3	1A-b 1B-a	—	南東-北西	長 3.3 × 幅 3-3.6	—	—	1 面	6 C 後~末(?)	SD1を切断
SD4	1・2B	—	東-西	長 (4.5) × 幅 2-1.2	—	—	2 面	6 C 後	SD2 SD3に切断される。
SB1	2A	—	N27° 30' W	2層 14 × 2層 34	隅丸方形	4-7m × 25-30	—	1 面	不明 倒柱のみ (土高構造)
SB2	1A-c	—	N47° 30' W	2層以上 (3段 × ?)	隅四角形	30-45 × 20-25	—	1層以上 (2層以上?)	西・南面のみの検出 片断残
SI1	2A-c-d	隅四角形	北北西-南南東	(2.5) × 2.2	—	—	1 面	古墳後	SD3に切断される
SI2	1B-a-c	隅四角形	東-西	(3.0) × 2.5	—	—	1 面	6 C 後~末(?)	SD4を切断 SD2と重複
SI3	2A-b	隅四角形	北-南	1.5 × 0.8	—	—	2 面	不明	SB1関連遺構(?)

SB1の構築時期は不明としたが、国1バイパス敷地内の発掘調査成果に従えば、隅丸方形様をなす掘り方は主に奈良時代の掘立柱建物に認められた形態である。ただ奈良時代の建物の多くは棟方位を南北に向けており、調査区北西縁に位置するため断定できないが、1棟のみ孤立して存する例は稀である。遺構周辺の包含層(Ⅲ層)に含まれていた遺物は6世紀後葉~末葉に位置づけられ、ここでは一応古墳時代後半の掘立柱建物である可能性を指摘しておきたい。

今回の発掘調査区は、加藤芳朗氏が指摘した(加藤1985)古名栗川の北岸に位置する。古名栗川は国道1号線を横切り、北西から南東(原野谷川)へ蛇行しつつ流れていた旧小河川で、奈良時代の初頭にはすでに埋没してしまっていたと考えられている。検出した溝の流方向、SB1の棟方位はこの古名栗川の流路に並行ないし直交しており、昭和62年度検出の遺構群は、総体として、古名栗川北岸の自然堤防上(加藤芳朗氏によれば、自然堤防の発達にはむしろ南岸に顕著である)に、6世紀後半~末葉のころ営まれていた集落の一部と結論づけられよう。

出土土器について

SD2 磯・土器片集積部出土の土師器杯身には、口縁部が内傾・内彎するいわゆる和泉期の器形と浅く口縁部が大きく開く小形品がともに認められた。また須恵器杯蓋・杯身の最大径にも大小差が見られた。こうした違いを時期差と見るのは容易であるが、出土状態からみて、その一括性はかなり高いと考えている。

SD2 から出土した土師器杯蓋（第9図-12） 須恵器杯身（第10図-26）を除き、奈良時代に属する遺物は一切出土していない。出土土器の大半は6世紀後半～末葉に位置づけられる。今回の発掘調査地点は、坂尻遺跡奈良時代の遺構群（佐野邸家の範囲）の外側にあると判断して大過ないように思う。

本発掘調査を実施するにあたり、内山昌司氏（有限会社立地）、常務取締役工場長初本馨氏をはじめシノムラ化学工業株式会社の方々には、飲用水の準備等一方ならずお世話になった。ここに記して感謝の意を表する次第である。

参考文献

- 五島康司 古岡伸他 1985 「坂尻遺跡—一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査報告書」 建設省中部地方建設局 静岡県教育委員会 袋井市教育委員会
- 川江秀孝 1979 「静岡県下の須恵器について」『静岡県考古学会シンポジウム2 須恵器—古代陶質土器—の編年』 静岡県考古学会
- 1980 「第2章 墨吉土器の形態分類」『伊場遺跡発掘調査報告書第4冊 伊場遺跡遺物編2』 浜松市教育委員会
- 五島康司他 1984 「昭和59年度一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報—坂尻遺跡第4次調査—」 建設省中部地方建設局 静岡県教育委員会 袋井市教育委員会
- 加藤芳朗 1985 「坂尻遺跡をめぐる地形・地質学的背景」『坂尻遺跡—一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査報告書—自然科学編—』 建設省中部地方建設局 静岡県教育委員会 袋井教育委員会



坂尻遺跡 1面完掘状況 (北より)



坂尻遺跡 2面完掘状況 (北より)



SD2 SI2完掘近景(1面 東より)



SD1・2完掘近景(1面 北西より)



SD 2・4 完掘近景 (2面 東より)



SD 1・2・4 完掘近景 (2面 西より)



SB1完掘近景（1面 南西より）



SB2完掘近景（1面 南より）



SI3完掘近景（2面 北東より）



発掘調査風景

坂 尻 遺 跡

—昭和62年度静岡小松フォークリフト株式会社
整備工場等建設に伴う緊急発掘調査報告書—

1988年3月31日

発 行 静岡県袋井市教育委員会

〒437 袋井市国本3070-1

印 刷 株式会社 開 明 堂

〒430 浜松市中区町1-1